

国際ロータリー第 2680 地区
RYLA 学友会創立総会記念講演（2007年9月1日）

「RYLA 学友会に期待するもの～愛と奉仕の実践～」

元 RI 理事・RYLA 顧問 今井鎮雄(神戸西 RC)

ロータリーの理想とはなんでしょうか。

本年度国際ロータリーのテーマは、「ロータリーを分かち合おう」「Rotary Shares」であり、スケルトン会長の時には、理想を求め、「Share Rotary serve people」でありました。すなわち、私たちは、常にロータリーの理想・意味を求めつつ、何を分かち合うのでしょうか。過去、現在、未来を見つめながら、ロータリーの理想・意味を問いつつ何を分かち合えばいいのでしょうか。ロータリアン OB で成り立つプロバスクラブも、そのことを例会に持ちながら追求し続けておられます。

30年ほど前、松山の梶浦先生から RYLA を始めたいとのご相談を受けましたとき、是非四国地区との共同開催を提案させていただきました。その後、試行錯誤を繰り返しながらも大きな夢のひとつは、YMCA、子供会、ボーイスカウトなどの指導者の研修ではなく、既に訓練を受けた指導者の指導をして、これからどんな形で世界を見つめ、考え直し、次代を担ってもらうのかを、ロータリアンと共に学び合うことでした。

さて、1940年から終戦前までの私が海軍中尉であった状況を少しお話し、当時の青年の葛藤がいかなるものであったかに触れてみたいと思います。当時、海軍としてどこに本部を設置するかということを探索していました。浅草あたりの低いところはみんな海につかってしまうから、最初の進撃を止める時の場所には、東京で一番高台にある上野と本郷だそうであります。そこで東大が残るわけです。高台にあるので残るのでその高台の所に本部をおいて有益に活用したいということで、是非東大の校舎全部を帝都防衛主力に貸してくれという話が内々に出てきたと、司令官がお願いに来たそうです。そのとき東大の学長はお断りしますと言ったそうです。「いま私たちはこれだけの学生たちをトレーニングしています」と、「彼らはやがて戦争に出て、そして人命救助のための医学生として軍人として接するのです。あなたがたもこの場所を死に場所としてお考えかもしれませんが、私たちもこの教育のために死に場所としてここをいま守っているのです。ですからお断りします」と言ってお断りなさったそうです。そして、八月十五日の天皇の玉音放送、戦争に負けたという放送がありました。学生たちは安田講堂に集まりました。玉音だけを聞いてまた教室に戻ってきました。集まってくれと言った教授も一言も日本が戦争に負けたなんてこと

も言わない。そして「日本が負けた」と、後にも先にもラジオを通して天皇の直接のお言葉を賜ったのは初めてなんですが、学生たちは、負けたことを聞いてまた教室に帰ってきて、そしていつもと同じように授業が始まりました。教えてくださる先生も戦争に負けたことも一言も言わなかったし、また授業を受けている学生たちもそのことを一言も触れなかった。でも自分たちが何を次にしたらいいんだろうかということについて真剣に考えた。そういう中で、私たちは新しい時代を切り開くということについて、改めて学者としてあるいは指導者としてどうしたらいいかということをもみんなで集まって一所懸命考えたんですと、そのときの思い出を一昨年語り合って、それが一つの本に出ています。それを読んでもおりますと、おもしろい昔の話がたくさんあります。おそらく学長としての責任と教育の重さ、これからの教育が何をするのかということについて考えている。私もそのときには海軍中尉で肩章つけながら上海に大勢の兵隊を連れて行っておりました。負けた日本がこれから生きる道があるんだろうかどうかと真剣に考えました。

私は今そんな話しをするつもりはありません。実は13年前に神戸で大地震がありました。その神戸で大地震があって一日二日は手がつけられない状況でありましたが、今日ここにおられる新野先生から電話がかかってきて、そのころ新野先生は神戸大学の学長でいらしたんですけれど「私たちは若い者のように力もないし、震災復興のために石を担ぐこともあんまりできそうもないけれども、しかし、こういう災害の時、新しい時代を作るときにはどういうことを考えたらいいかということをも真剣に考えるために、知的ボランティアをしようじゃないか」と、「何が今これからは必要かということをもみんなで少しは考えよう」と言い出されました。私の家は御影にあるんですけれども、阪急六甲の倉本さんの学校の上の方まで歩いたら遠かったことを思い出します。山登りみたいなもんです。新野先生を中心に何人かの方々が集まりました。何人の方がお集まりになったのかももう忘れてしまいました。そこで、「一体こういう時には何が必要なのか」と、物理的な問題としてはいろんな形で道路を直すことも必要だろうし、あるいは食料を焼けていない所からどのようなルートで取ってきたらいいんだろうか。いろんなことを考えながら何が必要なのかを相談し、またそのことのために必要なものをなんとか手に入れる方法をみんなで考えましようとなりました。私はそのときに、これだけの大きな被害を受けたというのをチャンスに、私たちは多少価値観を変えようじゃないかと。今まで物があることが豊かだと思ったけれども、実はこうなったときに物があることが私たちを支えるものではなかったということに気がついた。じゃあ何が一番必要だったかということ、「あなた大丈夫、家が壊れているけれども、大丈夫」と言って声をかけてくれる方、あるいはですね、みんなが亡くなった人たちも含めてご家族の方がおられるときに、いつの間にか、千の風ではありませんが、なんかそういう音楽で癒しということが出来るんじゃないか。私たちはいったいみんなと一

緒に生きるってどういうことなんだろう、ということを考えてときに、今の東大の人たちも同じなんですけれども、今私たちが自分たちがおる所だけに立って物事を判断するのではなくて、もっと広い範囲の問題を色々考えたり、意見を交換したり、そこから自分の意見をまとめるということが大事なんじゃないか、というようなことを色々話し合いの中ででてきました。今まで長い間やってきた民族主義的な考え方からの世界観というものよりも、やっぱり世界の中の人間としてどう生きるのかということ、もういっぺん考えるということを今与えられているんじゃないかと、いままでの伝統の重さということ、深く思いながら、なおかつ一人一人の人間が世界の平和のために世界のことを知りながら、これからの若い人たちを育てていくことも一緒にないかな、ということ、考えたことを今思い出すのであります。

それじゃ世界のことをわかってもらえるような形では、ボーイスカウトとのトレーニングコースでも、あるいはそのほかの子供会のリーダーのトレーニングコースでもない、広い視野を持っているロータリアンの先輩の方々からそういう話しをしていただいてはどうだろうか、一つ大事なメッセージを伝え、リーダーシップを育てるのに是非送りたいということをみんなで考えてみました。誰にも負けない素晴らしい先生方の話を聞かせて頂く、一回目、二回目、三回目と、私のまわりにおられる先生方にも加わっていただいちゃべっていただく。一番最初に私は講義をするつもりはなかったんです。というのは私はディーンでしたからね。それで講義をするつもりなんか毛頭なかったんです。そしてそのときに、田中国夫先生という方がおられて、関西学院大学のこれは社会心理学の教授であられまして、広く社会の中の問題をいろんなおもしろおかしく私たちに説明して下さる、いい先生でした。その先生に来て頂くとお願いしたところ、前の日に電話がかかってきて「今井さんごめん」と仰られるのです。「実は自分の恩師が亡くなってそのお葬式やなんかを全部取り仕切らなくちゃならなくなったんで、どうしても行かれない」と、「ついては講演は止めさせてくれ」と、こちらはそれでも来てくれと言えないので、しょうがないから私は、「わかりました、それじゃ何とかします」と。といっても明日の今日に新しい先生に来てもらうわけにはいけませんので、「しょうがない、代わりに僕が漫才でもするわ」というので私が一回目に講義をしたのは、あれは本当の話、大変な恥をかいた一回目でありました。でも良かったでしょ。みんなとお話をするようになりましたけども、これが一つの大きな意味を持ちました。

もう一つは何か。ロータリーを分け合うという時に、ロータリーとは何なんだ。ロータリアンの方々がおられる知識とか知恵とか問題とか、ことにロータリアンの一番大きな問題は、他の団体と違うところは、ロータリーは自分たちの職業を通して奉仕をする、自分たちの職業を活かしながら奉仕をする、自分たちの職業を通してそれを活かしながら

奉仕をするということはどういうことなんだろうかと、ということを実際に考えました。で、このことのために、できるだけ多くのロータリアンの方々に出て頂くと。初め第一回というものはひどいもんですよ。受講生たちは、フォーラムでは、「ロータリアンはどっかではん食べて遊んでばかり、何にも偉いことはないやないか、そんなヤツは信用せん」と言っていました。松浦君、そんなこと言ったんじゃないですか。僕は「そんなことはない」と、「私たちはこんなつもりでみなさんと接しているのです」という話をしたら、ようやく第一回の来られた人たちはですね、多少の攻勢の手をゆるめてね、「じゃわかった。ここにおけるロータリアンは信用するけれども、一般のロータリアンは信用しない」と。どうですか、一般のロータリアンはいますか。今日、ここにいるのはそうじゃない。そう言うんですよね。「そうじゃない」これは私たちの願いなんです。それをお互い同士がシェアしようと思っているんですよ。

それから、ロータリーとはどういうことかとみんなに伝えてもらおうと、私たちは初めはロータリーとはということよりも青年たちのための広い意味でのリーダーシップを考えましたけれども、ロータリーが持っているものを分けるということについて、やっぱりこれは考えなければならないと。するとこの三十年の間にシェアロータリー出来たのではないかと思うんです。というのは三木ガバナー、稲山ガバナーが立派に居られる。私たちの地区ではちゃんとシェアをみなさんにしたということをしてですね。威張っていいのではないのかとこれは思いますね。

もう一つは何か、お互いの友情ということでもあります。私はキャンプの専門家でありませぬ。初代のキャンプ、私は兵庫県キャンプ協会の初代の会長だったかな、なぜならキャンプについて長い間子供のときからいろいろしてきましたから。このキャンプをするということについてボーイスカウトのようなリーダーだったり、社会教育についての専門の仕事をしておられたり、いろんな方々が集まってきていただいて、私たちはその経験を分かち合おうじゃないかと。でもキャンプファイヤーだけは、ちょっと違った形で大人のためのキャンプファイヤーをやろうじゃないかと言って、いわゆるボーンファイヤーではないカウンスルファイヤーを焚くことになりました。

何故私たちはこのライラが三十年も続いたんだろうかと思うのです。実は時代が非常に変わってまいりましたけれども、同時にまた、時代はいつでも新しいリーダーシップを要求しているということです。サンアントニオでやりました国際ロータリーの大会の時、初めてライラを全世界規模でやりました。そしてその次にスペインでやったときも全世界的な集まりでやりました。日本でもやりたかったのですが、できませんでした。しかし、今年も世界のライラリアンが集まり世界のライラの大会をしました。それは何故かと言いますと、ライラが持っている意味とライラの持っているモチベーションが大勢の人たちの共

感を得て、ライラリアンがずいぶんたくさん大勢になったということです。「是非世界から一同に集まってやっていこうじゃないか」と、今年も日本から何人かの人たちが出てくれました。この場のリーダーをしてくれた八幡君も今年行って来てくれましたし、海沼さんも行って来てくれましたし、みんなそういう人たちが行って来てくれました。サンアントニオの時にライラリアンという言葉も作りました。古い人はライラリアンなんて言葉を聞いたことがなかった。このごろはライラリアン、ライラを卒業したらライラリアンです。ロータリーに属している人はロータリアンです。ロータリアン、ライラリアンとは、お互い同士が助け合って私の地域の問題を考える。ライラリアンの人たちで、十年以上経っている人はロータリアンの資格があるんだから、こんなかにおられるライラリアン、今日お集まりの皆さん方は、それぞれある意味においてはロータリアンになる資格ができるだろう。私たちは財団学友の場合には、ロータリアンの資格は出来ましたが、ライラを卒業した人たちもロータリアンになれるんだと。会員募集をよそで捜してくるよりもそのほうがよほどロータリーをシェアするためには役に立つ人材がたくさん育ってきていることを考えた時に、私たちはそのことも一つ仲間に入れるためには考えなきゃならない。それでライラ学友をスタートいたしました。

さて、私は今の時代において、あなた方に大変お世話にならなきゃいけないことを申し上げなければならぬと思っております。短く二つほどのことを申し上げます。1905年にロータリークラブが発足しました。ちょうど103年前にロータリーが生まれましたね。その時に一番初めにポール・ハリスという弁護士さんが、ロータリーを作ろうと言ったときには、奉仕なんてことよりも互惠という概念が中心でした。お互い同士が違った商売をしている。集まった人は弁護士のポール・ハリスとそれから石炭屋さんシルベスター・シールですね。それから鉱山技師のガスターバスロア、それからハイラム・ショーレ、洋服屋さん。洋服屋さん、石炭屋さん、鉱山技師と弁護士と、あんまり売れない弁護士かもしれないかもしれませんね。ポール・ハリスなど、若いその人たちが集まって、お互い同士の職業を通して支え合う会を作ったらどうかと、しかもシカゴのようにみんなが一所懸命働いて儲けるということに中心になっている、人の足を引っ張るような世界になっているから、私たちは仲間と良いフェローシップを持ってやろうじゃないかと、4人がロータリーを作ったと私たちは聞いております。こうしてできたロータリークラブは、最初みんな入らないかと会員の勧誘をしたときに、自分たちの商売に都合のいい人達を集めて、お互い同士の利益と言いますか、利益を目指してですね、やっていくようなものは、結局一人一人が人のものを取るんじゃないけども、グループでもってやっぱり自分のエゴイズムを發揮するのと同じじゃないかと、そんな会には入れないと断られたそうです。ドナルド・カーターという人がそういうことを言った。慌てたのは、その4人。入らんとっているよと。

で、そのことを聞いたときに、彼らは反省したのです。そして互惠という言葉を止めようと、奉仕って言葉を使おうじゃないかということになりまして、それが最初の、クラブにも奉仕をする、自分たちの職業を通して奉仕をする、自分たちの住んでいる社会で奉仕をする、自分たちの住んでいる世界を自分たちの地域社会だと思って奉仕をする、ということを考えるようなグループになろうじゃないかと、ということで勧誘しました。ただね、この4人は最後まで4人でいたわけではありません。やっているうちに互惠だと思ったのに、いやもうこれからは互惠は止めだど、お互い同士が支え合うってことを止めて、人に奉仕をしようと言ったとき、「それは、話が違う、やめる」と、四年近くおそらく、ガタガタしてました。そしてその間に「He profits most who serves best.」 お互いがお互い同士を奉仕をすることによって私たちの社会が出来るんだということについての哲学を、大勢の入ってきた人たちが支持しました。これが一つの事実であります。

もう一つの事実は何かといいますと、あのころ、すでにアメリカでは、大変な金持ちがたくさんいました。それより少し前、例えば、バンダービルという人は鉄道を敷くという仕事をしていました。そのときのアメリカ政府から大変広大な土地をもらってそして特別な権利といいますか、利権をもらって鉄道を敷くようになりました。そして鉄道が敷かれてアメリカの真ん中のシカゴまで来れるようになったためにアメリカはどんどん発展するんですけど、バンダービルは鉄道王としてそのころは大金持ちでした。ロックフェラーなんかもそうですね、そういう人たち、石油王、鉄鋼王と呼ばれるもの、カーネギー、ロックフェラーあるいはデュークこれはタバコ王であります。デューク大学というのはプライベートユニバーシティとして大変アメリカでは有名な大学でありますけども、そのタバコ会社のデュークという人であります。そういう人たちがあの時代にお金持ちとしていました。エジソンは電気を発明するだけではなくて、電灯会社を持つようになります。ティファニーなどは宝石を中心にして君臨していました。だけれども、そんな1905年の時代に集まった4人は何かというと、エリートじゃないんですよ。言い換えればその地域の中におった、その地域の密接してその地域の人たちと一緒に生きてきた、それぞれの石炭屋さんであったり、それぞれの洋服屋さんであったり。八百屋さんであったり、でそういう人たちが実在し、何がいったい中心だったのか。私たちは互惠ではなく手、お互い同士が自分の持っている仕事を神から与えられた役割だと思って、そしてそのことに努力するということが必要なんだ、ということをもみんなが少しずつ考え始めたど。

これには理由があります。アメリカはそれよりもずっと前、1600年時代にアメリカに入植しました。それは誰が作って来たかと、それはイギリスにおった人たちやなんかがイギリスの宗教とかなんかと少し違ったグループが、自分で自分の自由になる世界を作りたいと、自分の信念に基づいて世界を作りたい、というのでメイフラワーに乗って、そして

アメリカに渡ってきた、ニューイングランドエリアというイギリスから一番近い所に。ニューイングランド、新しいイギリスだと言って作った場所ですけれども、その人たちのグループをワスパ(WASP)といいます。ワスパというのは、ホワイト、白人で、アングロサクソン、おもにイギリスの人たちであり、それからプロテスタント、そのころイギリスの国教は聖公会で、いわゆるプロテスタントじゃなくて、カトリックとの間みたいな宗派でした。その人たちがもっと自由に自分の信仰をしたいという人たちの、WASP というグループが中心になって、メイフラワー号に乗って移動してきて、クウェーカーの人たち、非常に厳しい掟を持ちながら、自分たちで奉仕をして、自分たちの自由を求め、自分たちの必要なものを捧げ合って、助け合おうという世界を作ろうじゃないかと。そうしてアメリカを作ってきた。しかし、私たちはみんな助け合おうんだと言って生きてきたのに、1905年のあの頃になったときに、みんながお互い同士、自分たちで足を引っ張るような社会になったのは残念だと思っている人たちがいたのです。小さいけれどもロータリアンの人の集まりは、あれこそ私たちが望むところの職業人ではないかと、そういう意味で高くですね、ロータリーのグループが、あの人たちなら信用できる。あの大きなバンダー・ビルドであっても、カーネギーであっても、お金を儲けてから財団を作って良いこともしてくださいましたが、ある人たちは強盗貴族という名前で彼らのことを言う時代でありました。

その頃に職業と倫理について気がついた人にマックスウェバーという学者がいます。マックスウェバーはそのことに気がついて、資本主義の産業社会が一生懸命働いても儲けるということに中心を置くときに、その時に、一体信仰を持っている人たちあるいはそのような新しい意味で自分の確信を持っている人たちはどのような形で生きたか、ということを考えるために、イギリス中を歩き回りながら、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神の第一章を1904年に書いているんです。で1905年にね、セントルイスでもって世界万国博がありました。その万博に付随して社会学者やなんかが集まって学会がありましたときに、マックス・ウェバーは一章だけ書いておいて、アメリカを見よう、イギリスから渡ったあの人たちが行ったアメリカを見ようと言ってアメリカに来て、アメリカにおける経済界の様子を色々見てるうちに、今のようなWASPの人たちが持っている心の中にあるものがアメリカの中には生きているんだということを感じながら帰っていきました。ロータリーと出会ったということは書いてありませんが、おそらく出会ったかもしれないけれども、1905年に4人のグループが出来たのと、そのころすでに学者であったマックス・ウェバーとは出会った記録はありませんが、そんなことはないと思いますが、けれども何かそこに一脈通ずるものがあるのかもしれない。で彼は帰国して、後の章を書いてあの本が1905年に出来たというふう考えられています。もっと後まで出版を遅れたのかもしれない、10年ぐらいまで遅れたのかもしれない(資料によると1904年第一章、1905年20

章が刊行)。しかし、そういう時代が、私たちはある時代の中にどんな思想とどんな考え方が大事か、ということはいつでも問われなきゃならない時代にいるのです。

ところが今、二十世紀、二十一世紀になりましたけれども、みなさんどうでしょう。ついこの前、あのドイツの首相が来ました。ドイツ首相は(メルケル首相)物理学者ですね、彼女は、今の世界はこのままエネルギーを使っていったなら、今度は地球そのものが破滅する、と言って、地球の問題、環境の問題を真剣に考えよう、国連なんていうと、国と国との問題を調整をすること、平和を捜そうとしたもんですから、地球全体の環境問題については考えなかった。その中にあえて、そういう自然の中でまさに大変な時になろうというときに、それぞれの国が大事に思ってこのことに取り組む必要があるんじゃないかと、日本に来て、阿部さんに、来年にこれ引き継いで下さいね、そして来年までに世界の主だった国々の主だった責任者たちが、自然環境の問題をですね、真剣に考えるようになってくださいね、と言いだしたことは、二十一世紀の変化のひとつをですね。その証拠に、ついこの前あった京都議定書にアメリカは批准していません。何故かという、それを批准したらガソリンの量を減らさなければならなくなったら、アメリカはこれ以上発展ができなくなるから、産業界から文句がくるかもしれない、だから総論は賛成だけれども細部は反対ですと言った。そして、ブッシュ大統領は、南アメリカでありました次の環境会議には欠席をしたりしています。この次はそうはいかないと思いますけれど。

けどもそんなような時代になったときに、学者たちが集まって考えたことは何かと言いますと、二十世紀は多少、私たちの欲望を満足させるためには成功したけれども、私たちが幸福になったかどうかは疑問の余地がある、ということを言われました。これは私たちにとっても非常な警告であります。ことに私たちは1980年、もう少し後でしょうか、今日は新野先生おられるから本当は聞いてみたらいいんですが、いわゆるグローバリゼーションという考え方がだんだん広まってきてまいりました。そしてそのことのためにですね、グローバルな形で経済も動いたらいいんじゃないか。いままでのような形じゃない経済というものを考えるべきだ。マネタリストの、たとえば、ミルトン・フリードマンのような「お金が中心に資金さえたくさんあれば儲けも多いんだよ。仕事もたくさん出来る。そして金融消費、会社の社長さんは他のことを考えなくてよろしい、お金を一所懸命株主から集めてその代わりいい仕事をして儲かったならばそれは株主に返しなさい。株価を高めることによってもっとお金が集まってくるようにしましょう。」こういう考え方の形を経済の効率の問題で主張し始めました。構造改革だからみんなやろう。

今、私たちの国は「いざなぎ景気」以上にいいんだそうですね。タクシーの運転手に景気はいいかと聞いたら誰も景気はいいとは言いません。僕はタクシーに乗るたびにあなたのところは景気はいいかと聞くと、神戸のタクシーの運転手さんは誰も景気はいいとは言

いません。東京行ったらね、景気がいいと言います。何故かと言うと、大きな会社の中での経済の動き、いわゆる、お金の金融資本主義に属してる人たちの景気はいいかもしれないけれども、全体から言ったときに、失われた10年と言われるように日本は必ずしもそうじゃない。一体そうなった時にどうなるんだろうか。1995年でしたか。舞洲で、IT革命が行われてグローバルゼーションがあったときに経済の構造をどうしたらいいのか、ということを考える会議がありました。このとき、二つのグループに分かれました。一つはマネタリストといいますか、そういうことを考えている、宮内さんなんかが一番大将でありますね。で、彼は雇用のことを今は考えられないと。とにかく、今世界化の時代にあるときに世界に遅れないようにするためには、膨大な資金を集める株主によって、その起業主にしがたってお金を集めて新しい仕事をしていかなければ雇用なんて考えられませんか。それでなるべく安い労働力をたくさん取ったらいいじゃないか。これがひいては格差社会になるし、これがひいては正社員と派遣社員と契約社員とアルバイトになる。それに対して経済界の今井さんという、私と一緒に名前の経団連の会長さんがおられました。「宮内さん、それは国賊ですよ、私たちの国は従業員と一緒にみんな企業で働いてきて、その人たちと一緒に暮らしているんです。そのことを無しにして私たちは考えることはできないんですよ。だからマネタリストさんたちの考えでは私たちは行きませんよ。」こういう事を言いました。今それが、日本の中で非常に大きな問題になっています。この辺の問題については私は専門家ではありません。その中でいわゆる職業奉仕というのは何か。基本的なですね、ロータリーが考えておかなきゃ行けない、職業奉仕というものをどこの所でしっかりおさえたいかということ、どう考えたいのかということですね。何回も新野先生にあのお話を伺ったことがあります。そこが問題になってきています。これに対して、今日はひとつだけ新聞の切り抜きがありました。6月15日金曜日の神戸新聞にですね、ロナルド・ローアというイギリスのあの人は経済学者ですか、社会学者ですか、経済学。この人おもしろいんです。私たちとあんまり変わらない年の人ですが、戦争が、日本が戦争に負けた頃にですね、日本語を勉強して日本に来てね、そして日本の経済の勉強をいろいろしました。で、私はその経済学のことですね、あの人は学歴社会という文明病ですか、そういう本を書いているのに出くわしたことがあります。このロナルド・ローアという人は日本の経済のことについて非常によく知っていて、最近でも、去年くらいに会社を誰のものにするのかと、岩波新書に、日本が持っている経済界のことを考えたときに、わたしたちはただ単にグローバルゼーション、これはアメリカンスタンダードだった。そのアメリカンスタンダードにだけまねをしたんではダメだということを自分たちでもう少し考えろと。知恵がないんじゃないかと。これにはそう書いてあります。そのことを日本にもういっぺん警告すると。今日本の経済界は混乱をしているけれどもそのことについてはもういっぺん

ん考える必要があるんじゃないかと言っています。

もう一つ、アメリカのことです。アメリカのブッシュ大統領の政策がだんだんだんだん悪くなっていっている。みなさんも気がついて、異論も少しずつ多くなって、そして彼を支えているブレーンの人たち、それぞれの理由をつけてみんなブッシュ陣営から退いていくという現実があるのをご存じですね。そういう現実の中でですね、フランシス・フクヤマという二世の学者がいます。この人はもちろん二世でありますから、アメリカで勉強してアメリカの今のブレーンになる人たちと非常に仲の良い人でありますけれども、日本語で訳された本で、「アメリカの終わり」、そういう題の本が出ました。これはね、日本の訳があげつないんですけれども、英語の題がね、「America as the cross road」（十字路に立つアメリカ）というもので、アメリカの政治家たちが今大きな間違いをしていないか、ということを書いてあります。十字路に立っているよと。アメリカがかつて理想にしたものと今、ブッシュが追っかけようとするやり方というものとずれてしまっている。これを直さない限り、アメリカは決して世界の今までのような指導者にはなれない。アメリカが指導者になろうとすれば、アメリカがかつて持っていたようなビジョンとか夢とかいうものをやっぱりしっかり持たなきゃならない、ということが書いてありまして、これが今ヨーロッパで大変有名になっているってことが出ていました。野尻先生、あのフクヤマっていう人は、私の友人の息子です。お母さんが同志社で私一緒だったんです。で、1950年にシカゴに行って、シカゴ大学で勉強してフクヤマさんと出会って結婚して生まれたのが、あのフランシスなんですね。私と一緒にのお母さんはもう亡くなったし、お父さんも亡くなった。彼はカナダにいますが。アメリカでも今考え方についていろんな形で問題があるのはどうということかと、アメリカが最初に考えた問題と今アメリカが対応しているやり方は違うのではないかということです。例えば第一次世界大戦は戦うときにアメリカは何て言ったかということ、「The war for the end of the wars」（いろんな戦いの終わりの戦い）になる戦いを第一次世界大戦でするんだと、だからみんながまんしてくれ、と言って戦いをした。そして2度目の戦い、つい私たちが負けた戦いは何て言ったか。これは民主主義と帝国主義の戦いなんだと、だから帝国主義に勝たすわけにはいかないって言ったから、みんながまんしてくれて、アメリカ人はそれにフォローしていった。で、今はそうではないんじゃないか。自分たちがあのツインタワーを倒されて後ですね、もう慌ててテロを追っかけたり、いろんなことをしてですね、そしてあそこには原爆があるからと、イラクを滅ぼしたりしたけれども、なかった。なんか疑心暗鬼でそういうふうな戦いの仕方をしていてアメリカの大義が失われてるんじゃないかって、そういう意味の方法をしっかりと考えないと、たとえ新しい二十一世紀をリードするような国にはなれないということをそのフランシス・フクヤマという人が、「アメリカの終わり」という本に書いています。最後は、日本に

一章を設けてですね、書いております。私たちいまそういうことを考えながらいるときに、若い皆さん方が、よくそのことを考えながら、世界に通用する人間といいますか、あるいは指導者として立っていただきたいというのが私の願いであります。

コペンハーゲンの世界大会に出たときに、ジェフリー・サックスという人が、これは国連の、ミレニアムプロジェクトの責任者でありますけれど、その人が言っているのは、「大きな国の、たとえば、アメリカがイラク戦争で使っている二日分の費用をかけたならば、世界の貧困をなくすことが出来るけども、それをアメリカはしていないじゃないか。」金額的にいってですね。「それに対してロータリーはどうか。三十年かけて、未だに撲滅ができないけれども、なおかつポリオプラスを、ポリオを撲滅させようとして一所懸命努力して、小さなお金を出し合っている。しかし、そういうこと考え方が世界中に広がるときに、初めて世界は、隔々に住んでいる人の貧困をなくすことができるんだ」と。こういうことを、彼はコペンハーゲンで話をしました。「The end of the poverty」という本に翻訳されてでておりますけれども、そういうのもみなさん見て頂いて、私たちが今大変苦しい時代にあって、私たちの国の中でもどうしていいかわからないというような状況ですけれども、だからこそ、私たちは世界の中の状況や大きな歴史の流れの中で新しい指針を見つける。ロータリー自身はその意味において、ただグローバリゼーションの中で職業奉仕をしてはダメだ。やっぱり小さくてもいいから、そのことをやるのが、本当は大事なんだと。そこで教わって私の思うことに、私は、ライラのこの学友の諸君たち、三十年、二十年、十年前に集まったみなさんたちは、今ここでもって考えたときに、世界の大変なときに、日本のいい指導者になるためにもう一つのことを深く考え、集まりながら、立派な先輩たちがたくさんおられるし、講師の先生もおられるのだから、そういう方と一緒に新しい時代を切り開く。大事な役割は、自分たちにもできるんだと、自信を持ってやっていただけたらありがたいな、というふうなことを話し、雑談をさせていただいて、責めを負わせていただきます。ありがとうございました。